烏鬼蕃伝説とその遺跡※

国　分　直　一

On the Site Relating to the Wu-kuei (烏鬼) Legend※

By

Naoichi KOKUBU

It is well-known that legends on the Wu-kuei (black devil) are mentioned in the Taiwan-hsien Chih and Ho-shan-hsien Tsai-fan-tse. But we may well wonder whether these Wu-kuei were Negroid people or not. The Tai-wan-hsien Chih says that the Wu-kuei can walk on the water like a man going on the flat earth. However, the above account seems to have been brought from the Dutch legend in Ming history.

With regard to the Wu-kuei legend mentioned in Ho-shan-hsien Tsai-fang-tse, more terrible coloring seems to have been added.

In the "Geological Dictionary of Taiwan", four Wu-kuei legend sites are mentioned by Mr. K. INO. These sites are as follows:

1. Wu-kuei Bridge (Yung-kang dist.) in Taiwan-hsien Shih
2. Wu-kuei Well (Tainan city) in Taiwan-hsien Chih
3. Wu-kuei-po Hill (Kuang-yin-li) in Ho-shan-hsien Tsai-fang-tse
4. Wu-kuei Cave (Hsia-liu-chiu Island) in Ho-shan-hsien Tsai-fang-tse

Mr. K. INO regards these places as the sites related with Negroid people who were brought to Formosa in the Dutch occupation days. However, we may well wonder whether all these were the sites left by Negroid people or not.

Viewed from the description in Ho-shan-hsien Tsani-fanf-tse saying that strange stones and beads in agate were found from Wu-kuei-po hill, it seems natural to regard Wu-kuei-po hill as a prehistoric site or ancient site of Pei-po-tribe people.

With regard to Wu-kuei cave, the present author rather infers the cave as the site related with the prehistoric Hsiao-liu-chiu people. The author's research work on Hsiao-liu-chiu Island in May, 1948 brought some perspective concerning the culture of the pre-chinese inhabitants destroyed long ago. Dr. T. KANAZEKI and I found the earth bed in the Wu-kuei Cave, and stone-cists of Taliao which suggested the burial in stretched position have a close resemblance to those of Ken-ting.

※ 水産講習所研究業績　第360号，1962年1月18日 受理.
Contribution from the Shimonoseki College of Fisheries, No. 360.
Received Jan. 18, 1962.

烏鬼蕃に関する伝説は台湾県志，鳳山県採訪冊に記載されているために，早くから台湾史研究者の間に烏鬼蕃とは何んであるかについて興味ある問題を提供している。

台湾県志では烏鬼を紅毛之奴也として，「其人遍体純黒，入水不沈，走海若平地」と述べられているが「海面を走ること平地の如し」といった性情記載はおそらく明史の和蘭伝に見える和蘭人の使役する烏鬼についての説明をそのまま引用したもののようである。

鳳山県採訪冊になると転化潤色は甚しくなり，烏鬼蕃は頷下に魚腮の如き腮を生じ能く海中に数日伏するとまで述べられている。

台湾県志によれば中国の地誌に現われる烏鬼国の烏鬼をさすもの，即ち阿弗利加のネグロ，或いはネグロイド系の黒人をさしているようであるが，烏鬼に関する伝説として伝えられているものが果して，すべて黒人について伝えられたものであるかどうかは問題である。

台湾における烏鬼蕃伝説についての最初のまとまった考証をされた学者は伊能嘉矩氏である。伊能氏は欧米各国の商賈が阿弗利加の黒人を奴隷として売買する風の行なわれた事，殊に西班牙，葡萄牙，和蘭人に最も甚しかったことから考え，又その伝説の行なわれる範囲が和蘭勢力の及んだ範囲において見られた事からも考えて，台湾の古文献に散見する烏鬼蕃伝説をすべて黒奴に関係あるものと考えようとしておられる。（大日本地名辞典，台湾の部，134頁〜135頁）

和蘭人渡来当時黒人を伴い来り，各種の使役に当らしたであろうことは黒人奴隷の売買，使役の風があったことから見て十分考えられることであったと思う。明史の和蘭伝に黒奴についての記載が見えている位であるから，黒奴についての知識は東洋においても沿海地方の港市において，ある程度拡がっていたと見てよいであろう。

和蘭治下の台南地方の如きにおいて黒奴に関する伝説があっても不思議はないように思われる。然し後代において，なにか不明の遺跡が発見された際に，それは烏鬼蕃の遺したものかも知れないとして烏鬼蕃遺跡に関する伝説が生まれてこないとはいえないのである。

伊能嘉矩氏は烏鬼の遺跡として現存するものとして，次の4例を示された。（大日本地名辞典台湾之部134頁〜135頁）

1．烏鬼橋　永康里（今永康下里三份仔庄に属す）紅毛時　烏鬼所築　烏鬼紅毛奴也（台湾県志）
2．烏鬼井　在鎮北坊（今台南城内打銃街に属す）水源極盛　雖旱不渇　先是　紅毛命烏鬼　鑿井砌以林投　舟人需水　咸取汲焉（台湾県志）
3．烏鬼埔山　在観音里（今観音中里蜈蚣潭庄に属す）相伝　紅毛時烏鬼聚居於此　今遺址尚存　樵採者　常掘地　瑪瑙珠奇石諸宝　蓋和蘭時所埋（鳳山県採訪冊）（今も烏鬼埔山麓に一古井あり伝へて烏鬼の鑿つ所とす）
4．小琉球嶼天台灣石洞　相伝　舊時烏鬼蕃族而居　後泉州人　乗夜放火盡燔斃之云々（鳳山県採訪冊）東港の人洪古春の実査によれば該遺跡より古土器および白螺銭を得たりといふ）

以上の遺跡について伊能嘉矩氏は次のように見ておられた。

> 其の遺址と伝ふるものの和蘭人の勢力の及びたりし地方即ち台南城内及び永康下里に在るものは橋梁と井泉と即ち事業に属し，其の勢力の及ばざりし地方即ち観音中里及び小琉球に在るものは主として聚居の遺跡といふに係かるは恐らく前者は彼等が和蘭人の退台後自然の解放に依りて，余喘を山陬海島に退保せるを告ぐるに非ざるか。

と述べられ，また奴隷の境遇上台湾において生殖的関係の生じたとは信ずることが出来ないとされる。また小琉球の如きにおいては後に漢族のために燔殺の厄に羅った等の事情を考えるとわずかにその遺址を止めて絶滅してしまったものであろうとされた。

然し以上の4つの遺跡中，3および4の遺跡は和蘭時代に渡来した黒人の遺跡とは考え難い。

3の烏鬼埔山の遺跡において瑪瑙珠や奇石諸宝が得られるということは興味深い記載である。瑪瑙珠は現

存の Indonesia 系原住民族も愛用している。平埔族の遺跡と伝えられる所から多数得られたこともある。故尾崎秀真氏は淡水河流域の平埔族の故地から発掘したという夥しい瑪瑙珠をもっておられた。瑪瑙珠は尚先史土器に伴って発見される場合もある。かかる事情を考え合わすと，烏鬼埔山の遺跡は高山族或いは平埔族に関係する遺跡か或いは先史遺跡であるかのいずれかであろう。「蓋和蘭時代所埋也」の如き解釈は鳳山県採訪冊の編者が気をきかして加えたものであろうと考える。

次に4の小琉球天台の石洞である。伊能氏が「東港の人洪占春の実査に拠れば該遺跡より古土器および白螺銭を得たり」とその所聞を記載されていることを通しても，先史遺跡であることは推察出来る。白螺銭とは *Conus* の頂部を磨いて作ったものであろう。平埔族の旧址や先史遺跡から発見されるものである。筆者は1948年5月金関丈夫教授に随伴して小琉球天台灣の石洞を実査するに至ってその性質を明にすることが出来た。石洞は内部の陥没崩壊が進んでいたので状況の変化はあるが，明らかに住居址の状況を示していた。洞内から先史土器片とともに先史土器片が発見された。尚石洞の入口附近に鹿科の下顎骨が発見された。石洞の東北方台地上に近代中国陶片と先史土器片と石器を伴う先史遺跡が発見された。中国陶片を伴う所から見て，比較的新しい時代に属すると見られる。然し石器がまだ使用されているのである。天台の台地を東方に下って大寮の海岸に至ると大寮の集落の中に石棺群の一部が露出していた。発掘の結果は全く墾丁寮の石棺遺跡と同系のものであることが明らかになった。かくてこれらの新発見を通して小琉球に先史時代人が比較的新しい時代まで居住したことは推察され得る。伊能氏は烏鬼蕃を泉洲人が夜に乗じて放火燔斃したと記載しているが，同島には今日でも漢蕃闘争の伝説が伝えられている。ただ同島警察官駐在所に日本時代の初期より伝えられている須知簿には「約250年前に洋人一小艇にて来り上陸せんとせしに，彼等烏鬼蕃等は之れを覆没した。茲に於いて洋人等は大いに激怒し，依て本船より多数の船員上陸し来りて殺戮せりと云ふ」と伝えている。いずれにしてもこれらの伝統の事件は比較的近代においておこったものとして語られていることは事実であろう。天台の洞窟はおそらく敗残者の最後の逃避所であったのではなかろうか。その遺跡をとどめたものは墾丁寮の石棺と同系のものであるらしく，和蘭人退台後余喘を海島に退保せる黒人の遺跡とは考えられないのである。小琉球の遺跡については別稿「古文献を通じて見た台湾先史時代」および既刊の「小琉球の先史遺跡」において扱っているので本稿では詳説をさけたい。

Ludwig RIESS の台湾島史に「国姓爺の銃卒の中に二人の黒人を有せり，之れ以前久しく和蘭人に傭役せられ，銃の使用法を習得したるものなり」とあることや黄叔璥の赤嵌筆談に烏鬼を使わんとしたという記載のあることなどよりしても，おそらく和蘭時代に黒人奴隷が渡来し，そのあるものは鄭氏の時代にも引きつぎ傭役されていたであろうことは推測出来る。

また和蘭時代に諸種の工事に使役されたであろうことも想像出来る。烏鬼井や烏鬼橋にその名残を留めているとすることについてもこれを否定する積極的な証拠はないのである。その事が事実ではなかったとしても，そのような伝説を生み出させるような事情はありえたと思われる。然し集落址，住居址の如きはその遺跡を調査することによって，事実を確めることが出来るのである。

台南台地地方の永康里蔦松に当る地方において，台湾縦貫鉄道が開設された際に貝塚と夥しい土器の包含層が発見された。その際遺跡地方の伝説を採集して見ると，烏鬼が遺したものとする伝説が伝えられていることを知った。然しそれは明らかに先史貝塚であった。遺物の中には Philippine の Igorot 族の間に見られる human jaw hanlde（人間の下顎骨に孔をうがって把手として使用したもの）と酷似したものが発見されている。これなども黒奴の残したものとは考えられないのである。ただ永康地方に烏鬼橋があったという伝説がある位であるから，たまたま不明の先史遺跡が発見されたりしたために烏鬼に結びつけた伝説が生まれたものと見てよいように思われる。